



地区長就任のご挨拶

札幌地区長 勝谷 太治 神父



この度、地主司教様より地区長に任命された勝谷神父です。今回地区長としての抱負や思いを書くように依頼されましたが、準備や引き継ぎのない中での突然の任命でしたので、まだ整理がついておりません。これから司祭団や宣教司牧評議会の中で話し合い、今後の具体的なビジョン作りをしていきたいと思っています。これからのよりよい宣教司牧のための材料として皆さんにもお考えいただきたいたく、未整理な考えではありますが、抱負を述べて挨拶の言葉としたいと思います。

まず、理解していただきたいのは「札幌地区長」は他の地区と違って、人事権や財政権、地区内小教区の宣教司牧体制に対する権限がないということです。ですから、現実的なことを言えば、現時点で地区長の役割は実質「札幌地区宣教司牧評議会」のまとめ役です。ですから、ここでは宣司評について感じることを書かせていただきたいと思います。

宣司評のことを考えるとき私の中には一つのこだわりがあり、それがいつも心に引っ掛かっています。それは、準備委員会にかかわっていた時からの思いです。

宣司評発足の原点

1996年7月の宣教司牧評議会発足に至る前、準備委員会は約一年半の時間をかけて信徒協(信徒使徒職協議会)と司祭団の間に入って協議を重ねました。その時に議論された主な点は以下のようなものでした。

- 司祭、修道者、信徒が同じテーブルについて地区の宣教司牧についてともに考える：その為に信徒協は解散し、宣司評には全司祭と修道会代表が入る。
- 会議の負担を軽くする：札幌地区の信徒数に見合わない組織体制のため、何事についても会議が多く、それらの準備と実行のため膨大な時間と労力が費やされている。
- 縦割の弊害をなくす：それまで司祭団を中心とした委員会と信徒協の委員会があり、各委員会の調整がなされないために同時期、あるいは同日に研修等の行事が企画されることがあった。また、同様のテーマの研修会を複数の委員会が別々に企画したりすることもあった。また、委員会が多く人材が足りない。
- 小教区の意見を吸い上げる：小教区が抱えている問題にはその小教区だけでは解決できない事柄が多く、近隣の教会や地区として取り組むべき問題も多い。これまで同様の問題を抱えていても、小教区間の協力体制がない中そのような問題は放置され、先送りされてきた。

これらの、ニーズにこたえるべく打ち出された方針が、組織をできるだけ簡素な風通しのよいものにするということでした。具体的には、現規約の内容ですが、常設委員会は原則として置かない、地区内の必要に応じて様々な企画推進を行う幹事会を設ける(発足時は16名)。事務局は置かず、幹事会が兼務する。必要に応じてその企画実行のための一時的な委員会を設けてもよいが事後解散する、等でした。

しかし、発足した時には、信徒協現行の委員会の継続性を保つための当面の受け皿として、そのままほとんどの委員会が移設され、それまでなかった委員会、部会まで増設されました。そして、すべての評議員がどれかの委員会、部会に振り分けられることになりました。

さらに、幹事会を拡大し各小教区からの代表が入り、事務局が設置されました。多くの司祭が多忙ということで評議会出席を免除され、宣司評の議題が、司祭月例会でも議論されるという二重構造になりました。評議会も行事の話し合いや、多くの委員会、部会の報告がメインとなり、小教区の現場の声を吸い上げるということは、実質不


可能となりました。評議員の中には、評議会は座って我慢を強いられる忍耐の時間と感じている人も少なくないようです。それでいて、中心になって一生懸命働いている人には過度の負担を強いることになっています。

その後、この現状を改善すべくいくつかの改革もなされています。拡大幹事会がなくなり、企画推進委員会がなくなり、現状では事務局も吸収されて効率的な運営を模索するようになりました。しかし、上述の当初の課題はほとんどがそのままといってよいでしょう。

そんな中で別な流れではありますが、地区のブロック化がなされました。先日には地主司教様より地区を3ブロックとする新しいブロック体制が発表されました。今後の課題として、宣司評の組織をこのブロック制を取り入れたものとし、会議を減らし、小教区の声を吸い上げることのできる体制にできないかと考えています。ブロック体制を生かすことによって評議会自体をできるだけ本来の討議や意見交換ができる場にできないものではないでしょうか。皆さんの知恵に期待します。更に、ブロックを基本にして、新しい試みも可能になります。要理担当者の小教区を越えた活動の場をつくったり、小共同体の試みも地区全体では無理でも、ブロック内の小教区をモデルにして実践したりすることも可能になると考えられます。

いずれにせよ、今後の札幌地区での宣教司牧は小教区単位では成り立たないことだけは明白です。小教区の体制が主任司祭が変わるたびに変わってしまうという現状から、信徒、司祭、修道者が協力し合ってビジョンを共有し、一貫した宣教司牧にあたることができるようにする必要があります。ただし、この点になると、上述したように地区長の権限を越えたものになります。しかし、宣司評がビジョンを示し、司祭団や司教に提案していくことは可能です。

いつも他地区に後れを取っている札幌地区ですが、今後期待される教区の新しい体制の中で積極的に新しいビジョンと宣教司牧モデルを発信できる札幌地区となるよう、みなさんの積極的なご意見と協力をお願いして挨拶を終えたいと思います。皆さん、これからよろしくお祈りします。



バトンタッチ

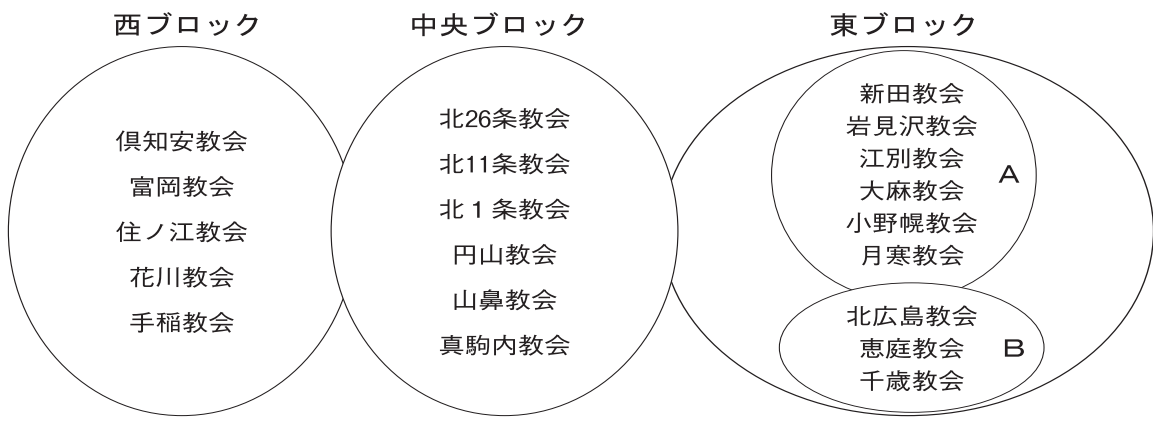
前地区長
近藤 光彦 神父

「体は一つでも 多くの部分あり。体に凡ての部分が 多くあっても一つの体なり」
〔コリント12・12〕
そして
「使徒あり、預言者あり、教師あり…」
〔コリント12・28〕
一言で言えば、これが中心理念を作る「一角」かとも思う。
今風に言えば、それぞれの立場、それぞれの責任を生きつつ、
「ともに」となるか。
思えば、健康あり、病ありの中で、皆で支えあってきたことに
万感の思いあり。
多大の感謝を表す!!。

札幌地区「ブロック体制」が改正されました

(2008年12月1日付け)

今までの4ブロック（東・西・南・北）制を、西・中央・東の3ブロックにし、東ブロックは更に2つの小ブロックAとBとに分けました。



—命をかけて「いのち」を生きる—
ペトロ岐部と187殉教者列福式 札幌教区巡礼団

小野幌教会 水上 泰助

2008年11月24日、長崎地方の天気概況は「雨」、強風注意報と最悪であった。

前夜の宿泊地嬉野温泉を午前8時に出発したバスが諫早インターを過ぎる頃には横なぐりの雨が車窓を激しく打った。

ところがバスが長崎市内に入った頃から雨は小止みとなり、駐車場に入って、会場へ徒歩で向かい始めると雨は止んだ。

会場の長崎ビッグルススタジアムに入ると全国からの参列者で溢れんばかりであった。



11時半、列福者を紹介するビデオが大スクリーンに写し出される頃から、正に時雨^{ツグ}れる感じで、しとごに雨が降り出し、合羽を通す勢いであった。

涙雨だねと隣人と語り合う。

12時、合羽に身を固めた待者の列が入場し始めた。

長崎教区各小教区から集まった800名の聖歌隊が入祭の歌を高らかに唱い上げる。

続いて500名の司祭者が続く。

雨が次第に小止みとなって行った。

司教団（韓国、ベトナム、フィリピン、インドより来日の司教団も加わる）に続いて教皇使節が入場されると、雨は「はた」と止んだ。

回心の祈り、あわれみの賛歌に続いて「列福の儀」が始まった。

殉教者の略歴紹介が殉教地ゆかりの各教区司教によって行われた。



「列福宣言」「教量書筒」の朗読と続いて、最後に「イエスキリストの福音を勇気を持ってあかしたこの殉教者たちの記念日は、法会の定める場所と形式に従い、毎年7月1日に祝うことといたします」と結ばれる頃には、薄日が差して来た。

福音はヨハネ12章24節から26節。

説教は白柳枢機郷。

枢機郷の声は感激に打ち震えているように思われた。

その説教が盛り上がった頃、黒く空を閉ざした雲が割れて、日が差して来た。

会場一帯に陽光が差して来た時、雨に冷えていた私の身体は温かさに包まれ、「主が喜んでおられる」と云う想いが私の心を包んだ。

ミサが終わる迄、この想いは私を離れなかった。



札幌司教区のホームページにも写真が載っていますのでご覧下さい。

<http://www.csd.or.jp/>

2008年度 札幌地区使徒職大会の開催

「188殉教者列福を祝い、ともに祈る ―証しと宣教―」



札幌地区使徒職大会が10月5日（日）に札幌市の藤学園講堂で開催され、上智大学文学部準教授の川村信三神父（イエズス会）の講演と司教司式のミサ、侍者の宿泊研修、子供の絵画展、WYDシドニー大会の報告などが行われました。

札幌地区は広く、遠方の小教区からは車で2時間以上かかるところもありますが、900名が参加し、午後の部にも多くの人が残りました。川村神父の講演はわかりやすく好評でした。これまで遠い存在と思っていた殉教者がとても身近に感じられた方も多かったと思います。また、WYDシドニー大会に北海道から参加した若者の喜びに満ちた報告もあり、とても充実した1日でした。

【講演要約】 「188殉教者の今日的意義と私たちの宣教」

川村 信三 神父（イエズス会 上智大学文学部史学科准教授）

188殉教者の列福について様々な意見があります。過去の話であるとか、他にもたくさんの方が殉教したとか、私たちが礼拝するのは神様だけだという強い意見もあります。人間を顕彰するつもりは全くありません。むしろ彼らが見ていたもの、最後まで信じ抜いたものは何だったかということに目を向けましょう。

殉教者が私たちに与えてくれるメッセージにはいくつか柱があります。一つは「信仰」～信じ抜いたということ。不信が渦巻く世の中で信じることに鈍感になった私たちに信じることを語りかけています。二つ目は「希望」～決して絶望していないこと。穴吊りという恐ろしい拷問を受けた殉教者も、暗闇の中で今まで信じてきたことに対する疑いの心が起こったかもしれません。しかし、彼らは最後まで希望を捨てませんでした。主イエスが私たちのために亡くなってくださったという希望を失いませんでした。そして最後に「愛」～誰も恨まず、友のために祈ること。「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」（ヨハネ15・13）というイエスの言葉通り、彼らにとって友はイエスに他ならなかったのです。このように現代の私たちへのメッセージとしてこの殉教を考えましょう。

自分は殉教などとてもできないと多くの方が思うでしょう。この188人も自分が殉教者になろうと思っていたわけではありません。キリストに倣い、信仰の究極の道を歩んだのです。それは、復活の希望につながることを私たちに教えてくれます。殉教者は信徒の共同体の支えで生きてきました。16世紀のヨーロッパの信徒組織「コンフラリア」を原型として日本的な信徒信心会ができ、信徒が中心となった共同体が運営されていました。信徒の共同体は、秘跡によりつながっていました。司祭が追放されて、秘跡の機会が激減したにもかかわらず、かえって秘跡に集中していきました。秘跡を残そうとする思いこそが、結束と継続の力となったのです。

これまで日本の教会が歩んできた道は決して間違っていないと思いますが、これからは違います。信徒がいき



いきとした共同体づくりが大切です。今回の列福を日本の教会にとっての信徒再生元年としましょう。様々な困難はあっても、信じて聖霊に委ねるしかありません。殉教時代の先輩たちが、司祭不在のなかで秘跡に与れなくなって、かえって秘跡を大切にしたい逆説に感じてください。

【質疑応答】

質問 お話のなかに、「殉教者を育む共同体は、秘跡に生かされた共同体」ということがありましたが、司祭が不在のなかで、どのようにしてそれが可能だったのでしょうか。

回答 ゆるしの秘跡と考えてお答えします。ゆるしの秘跡については非常に興味深いことがあります。『こんちりさんのりやく』というのをご存知ですか。これはキリシタン時代に出回った教理書ですが、そのなかにキリシタンたちが「オラシヨ」として唱えていた祈りがあります。その内容はゆるしの秘跡に関するもので、たとえ司祭がいなくても、司祭がいずれ現れたときに告白するという覚悟があれば、真の痛悔だけでゆるしの秘跡をしたことになるということです。これは日本的な例外で、今はもちろんゆるされませんが、迫害下の教会では、たとえ踏み絵を踏んでも真の痛悔をして、「こんちりさんのオラシヨ」を唱えてゆるしの秘跡の代わりにしてもちこたえていたのです。キリシタンたちが250年間、司祭不在のなかで待っていた原動力のひとつに「こんちりさんのりやく」という仕組みがあったのです。

質問 これからの宣教にコンフラリヤのような知恵が生きるでしょうか。

回答 現代の日本では地域共同体というのが崩壊しています。しかし、信徒を増やし続けている宗教団体はあります。そういった宗教団体は信徒組織を非常に充実させ、相互扶助団体を作っています。わたしたちが都会で失ってしまったような地域共同体を復活させています。カトリック教会は地域共同体づくりが遅れています。家庭集会などを行ったらどうでしょう。お互いに助け合おうということが少ないですね。だから農村とか都市とかに関係なく相互のコミュニティ作りのためには16世紀のヒントが生きて来ると思います。

質問 当時の信者が急に多数増えたという話がありました。何故でしょうか。

回答 確かに、村に帰って30人一緒に洗礼を受けたという話がありますね。実は、キリシタン時代の洗礼の一番大きな条件は、唯一の神、創造主がいるかないか、それを信じるか信じないかということだけでした。三位一体論とか難しい教義の話を教えてもらうのは後のことです。ほとんどの人は、絶対・唯一の創造主ということをも一つの関門として与えられ、それを受け入れれば洗礼を受けることが出来ました。あとの細かいいろいろなことは、『どちりなきりしたん』という教理書がありますから、それを復唱しているわけです。



虹の会一日研修会

テーマは「やさしい平和の話し」

虹の会は宣司評社会委員会の中の一つのグループとして日常活動を続けていますが、主なものは典礼に関すること、その他教区から発行される教区ニュースやカリタスなどの出版物の点訳、音訳です。

従って、私達が普段目にする平和についての動きなどの情報は視障者には、あまり届いていないのではないかと、いささか偏見かも知れませんが、そのような点から今回の一日研修会は、平和についてやさしく説いてもらおうと新海神父様をお願いしたところ快くお引受けいただき、虹の会の一日研修会となりました。会場はベネディクトハウスで9月20日(土)視障者4名ボランティア会員25名で会員以外も5名ほど参加されました。

新海神父様の講話は専ら、戦争の話ばかり。20世紀に入り戦争の様相は激変し、昔は戦争といえば原っぱで行ったものだった。

20世紀には7割の民間人が犠牲となり、戦死者は1億人にも、それは飛行機が出現したりと。都市爆撃により戦争が変わったことから始まり、カトリックの聖戦論・戦争になると誰が一番犠牲になりやすいかなど。

戦争はカトリックの教えに反するものであり、ひいては環境破壊にもなるということに発展しました。戦争はむごいとか人道に反するなどの意見になりやすいが、要するに福音の精神に反することである。

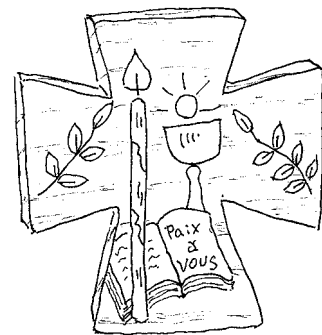
カトリックの聖戦論が通用しなくなったのは核兵器が出現し、脅威が増したからで、そのほか劣化ウラン弾やクラスター爆弾が使われるようになって来た。

聖戦の3条件として(1)できるだけ武力ではなく和解による話し合いの努力が必要。(2)どうしても戦争に訴えなければならぬ時、よりよい善を生み出すことができるならば、非戦闘員に犠牲を出してはならない。

(3)民間人(住民)の住む街に被害を出さないこと。

これらの条件が通用しなくなったのは、核兵器が猛威を振うようになったから。

更に戦争になるといやが応でも、非戦闘員のうち女性が犠牲になることを考えてよいのではないかと説く。女性が戦時、人権を奪われた例は限りなく、2000年12月、強制的に扱われた「元従軍慰安婦」が女性国際法廷で裁かれたこと。天皇が国の最高責任者として有罪とされたこと。戦争の犠牲になるのは子供達の例も挙げられた。現在まだ解決しないままの残留孤児が居ること。とりわけ幼児は戦時の中で、ひどい目に会ったことは、今更説くまでもない。



戦後50年の1995年にワシントン・スミソニアン博物館で戦勝50年の全米で行事があった時のこと。原爆投下のエノラゲイの展示のほか原爆展の実施を米国女性グループから持ち上がった時、退役軍人会からストップがかかった。だんだん傷みに対する無感覚が台頭し、いのちに対する感性を鋭敏にしなければならぬと痛感されたとのことでした。

戦後50年記念に1995年、南京に行かれた時のことも話されました。

上海から南京まで平和行脚したいと考えられ実行したとのこと。

このルートは第二次大戦の時、日本軍は補給を考えずに、唯前進あるのみと先走った。

結果はすぐに食糧が少なくなり、略奪が始まった戦時特有の心理状態というか、やりたい放題で、国際法で赤十字は捕虜の虐待はできないと定めていたのに、これを破り、15万名が犠牲にされたとのこと。日本政府はのちに生き残りの証人調べもしないで放置したまま。

今もある南京記念館には、南京大虐殺遭難同胞記念館と生々しい文字が残されているとのこと。中国では若い世代にも歴史をきちんと教えているので、青年層は当時のことは分かっているそう。日本人のことは許すが忘れないと云っている。

日本で守られようとするのは、国体で(天皇を中心とする支配、統治体制)ある。

かつて奈良を旅し法隆寺の聖徳太子の定めた「17条憲法」にも言及し「和をもって尊しとする」が平和の崇

高な理念としたことを強調された。

私達が時々耳にする言葉「シャローム」について解説していただき、平和の心が強く含まれていること、神の前にあって、どんな恩恵があるのか、深い意味を知りました。

時には戦勝であり、人によっては長寿、健康にも結びつく。この話がエルサレムという地名の語源になったことも知りました。

話は午前と午後にわたり、戦禍のことばかりであったが、次の機会に予想される研修会には、平和への重要な伏線としてあるように感じられました。

終了後、参加された方に感想をお聴きしますと高齢の方々は戦争体験者であり、当時のことが思い出されたのか、「よく分かりました」と心境を語っていただきました。

虹の会 谷口 正

宣司評スケジュール

1月15日(木) 18:30 月寒教会

企画推進会議

1月18日(日) 9:00 北1条教会

ミサ

教会学校見学

情報交換・分かち合い

1月31日(土) 9:30 月寒教会

要理担当者養成講座

1月31日(土) 15:30 かでる2・7 520研修室

社会委員会 講演会&上映会

平和への道 一基地と軍隊のないまちをめざして

映画「貧者の一灯」

～子や孫たちに語りつぐ闘い～

講演 井原勝介氏(前岩国市長)

一般 ¥1,000 中高生以下 ¥500

2月11日(水) 10:00 北11条教会

2008年度 一日研修会

テーマ「聖パウロの霊性と私たちの宣教」

講師 藤女子大学 阿部 包氏

2月12日(木) 18:30 月寒教会

合同・企画推進会議

2月14日(土) 9:30~15:30 北26条教会

テーマ「今、受けた信仰を見出すこと、

子どもたちに伝えねばならないこと」

講師 援助修道会 原 敬子

2月14日(土) 14:00 住之江教会

家庭部会講演交流会

テーマ「ご存知ですか?依存症」パート2

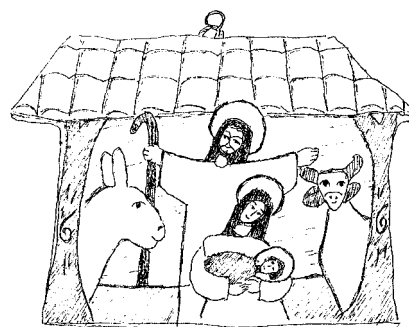
講師 日本ダルク代表 近藤 恒夫氏

2月22日(日) 14:00 月寒教会

2008年度第4回評議会

3月12日(木) 18:30 月寒教会

企画推進会議



主のご降誕と新年のお喜びを申し上げます。

家庭部会 講演交流会 「うつ病って、心の病気ですか？」Ⅱ

講師 ポロナイクリニック 高塚直裕 先生

11月29日（土）北26条教会にて講演交流会を致しました。50名程の方が参加して下さいました。今年度は札幌カリタスが共催、家庭支援センターが後援してくださっていますが、今回は高齢者部会も共催になってくださいました。

「数年後にはうつ病はアメリカでナンバーワン病気になるそうです」とエミール神父さま。アメリカ型資本主義の競争社会におけるストレスがいかに深刻で人々に大きな影響を与えるものか、考えさせられました。



「死にたいと思った事ありますか」誰も答えられずにいると「ぼくはあります。誰でも死にたいと思った事は一度はあるでしょう？」と高塚先生が大変重いけれど本音で話はじめられました。パート1に引き続き講演して下さった先生の「その人がその人らしく、その人なりの生活ができる。」先生の健康に対する考え方に共感を覚えました。今回も、薬の事、神経症との違い、医者との関わり方等多くの方から質問があり、丁寧に答えてくださいました。

<回復を助けるのは周囲のサポート>

うつ病の1番注意しなければならないことは、死を考えることが多い事「まずは生きること」とにかく「生きていてくれるだけでよい」というくらい気長に構える。頑張りなさいは逆効果、本人は精一杯頑張ろうとしているができない。うつ病の正しい知識を持って理解する（「気持ちの持ちよう」「心の弱さではなく」脳内の神経伝達物質の減少である。脳エネルギーが枯れてしまう機能的な病気）本人をありのままに受け止め、そして静かに見守り寄り添う。

—だまって側にいてあげる—

大きな決定は回復してからする

病気を治すパートナーとして医者を手先にする。根気よく症状に合う薬を探す。症状を具体的に短く話すのがコツ

予定の時間があっという間に過ぎてしまい、交流の時間があまり持てなかったのは少し心残りでしたが、「とても参考になりました」「わかりやすかった」「先生にホームドクターになっていただきたい」など感想が寄せられました。

今回北26条教会の武田さんのご配慮で手話通訳の奉仕をしていただきました。

会場作り、お茶の準備など北26条教会の皆様お世話になりました。有難うございました。

家庭部会 山崎美知子

♪次回 講演交流会 2月14日（土）午後2時 住之江教会（手話通訳の用意あります）

テーマ「ご存じですか？依存症」パート2 講師 日本ダルク代表 近藤恒夫氏

編集後記

新しい年を迎えて祈ります。

いつくしみ深い父よ、あなたは何のとりえもないわたしたちを、恵みによって神の子の身分にしてくださいました。このきずなによって集められたわたしたちが、あなたの思いをすべての人に伝え、あなたとのきずなのうちに、まことの幸せを見出すことができる恵みをお与えください。わたしたちの主、イエス・キリストによって アーメン。

— 188 殉教者列福のための祈り—